

# 青年期の自己愛的脆弱性に関する研究の動向と展望

神谷真由美・岡本 祐子

(2010年10月7日受理)

A Review and Considerations of Studies on Narcissistic Vulnerability on Adolescence

Mayumi Koya and Yuko Okamoto

**Abstract:** This study surveys research on adolescent narcissism from the standpoint of narcissistic vulnerability. It also considers issues and direction of research to be tackled from this point onward. Recent research on narcissism that seeks to understand two forms of narcissistic tendencies, grandiose form and hypervigilant form, has flourished. In Japan, however, because of its cultural background, there have been many more case studies of hypervigilant narcissistic tendency in clinical settings. Even for non-clinical cases, hypervigilant narcissistic tendency is associated with maladjustment. Therefore, understanding adolescence from the standpoint of narcissistic vulnerability, including the different aspects of hypervigilant narcissistic tendency, has great significance for clinical psychology. According to Kohut's theories, which serve as the basis for understanding narcissistic vulnerability, self-object is required from early life until the end of life. However, experimental research that studied narcissistic vulnerability from a developmental perspective has been scant, and consistent results have not been obtained. For these reasons, it is desirable for research on narcissistic vulnerability to advance experimental research that incorporates a developmental perspective.

Key words: adolescence, narcissism, narcissistic vulnerability, H. Kohut

キーワード：青年期，自己愛，自己愛的脆弱性，H. コフート

## 1. はじめに

自己愛とは、心理臨床大事典によると「自分自身を愛の対象とする心の状態（中村，2004）」である。自己愛の概念を提唱したのは、Freud（1914 懸田・吉村訳 1991）と言われている。Freudは、自己愛を一次的自己愛と二次的自己愛に区別した。一次的自己愛の状態では外界の対象は認識されておらず、リビドーは自我のみに向けられている。やがて、外界の対象が認識されるにつれてリビドーは対象に向けられるようになり、対象愛の段階が到来する。しかし、対象愛の段階に達した後でも、不安や葛藤が原因でリビドーが対象から撤収され、再び自我のみに向けられることがあり、これを二次的自己愛の状態とした。Freudは、自我に向けられる自我リビドーと対象に向けられる対象

リビドーの総和は一定であるとし、自己愛と対象愛は対立するものであり、自己愛を克服することにより対象愛が可能になると考えた。これに対しFromm(1956)は、自己愛と対象愛は対立するものではなく、基本的に連結し、切り離せないものとした。またKohut(1971, 1977, 1984)も、自己愛と対象愛とは、それぞれ独自の発達を遂げるとし、重要な他者との特別な性質の関係を通して成熟するとした（小松，1999）。Kernberg(1982)も、自己愛と対象愛が同時に発生し、並行して発展すると考えている。

また発達の視点から、青年期は自己愛が高まりやすい時期と言われている。小此木（1981, 1999）は分離一個性化の過程で起こる自己愛の高まりを、思春期・青年期の代表的な心性の一つに挙げている。親から分離する際、同世代の同性、友、仲間、異性へと、その愛

情・依存が向かうのと並行して、しばしばこの自己愛の高まりは、前期・中期思春期では自分を過大に評価して傲慢な態度をとったり、親や教師などの権威の無視や反抗の形をとるが、やがてこの自己愛の高まりは、自分を越えた理想像への同一化、自我理想、アイデンティティへと開かれた社会化された自己愛へと発展する。小塩（1998）もまた、青年期の自己愛の高まりを、自分自身への関心の集中と、自信や優越感などの自分自身に対する肯定的感覚、さらにその感覚を維持したいという欲求によって説明されるものとして、青年期特有の人格特徴としている。親から分離し、自分自身を見つめ、アイデンティティを確立していく青年期は、自己愛の高まる時期であり、この適度な自己愛の高まりは、青年の心理社会的発達を促進すると考えられる。

近年、自己愛研究において、自己愛傾向を「誇大型」と「過敏型」の2類型から捉える視点が隆盛になっている。しかし、日本の臨床場面では、過敏型に近い事例の方が多く（福井，1998）、先行研究でも過敏型が不適応と関連する結果が得られており（例えば、小塩，2001）、日本においては過敏型自己愛傾向が問題になっていると考えられる。また、過敏型自己愛傾向の諸側面を考慮に入れた概念に自己愛的脆弱性（上地・宮下，2009）がある。本稿では、自己愛研究の動向について概観し、今後の自己愛的脆弱性に関する課題と研究の方向性について考察する。

## 2. 自己愛傾向の2類型

近年、自己愛傾向を「誇大型」と「過敏型」の2類型を捉える視点が隆盛になっている。このように自己愛傾向に関する議論が盛んになったのは、自己愛性人格障害について Kohut（1971, 1977, 1984）と Kernberg（1982）が異なるモデルを提唱し、両者の間で論争が交わされたからである（上地，2009）。自己愛傾向における2類型については、複数の研究者が指摘してい

るが、最も有名なものに Gabbard（1994）の見解があげられる。Gabbard は、自己愛性人格障害を対人的関わりにおける典型的なスタイルに基づいて2つの異なるタイプを両極とする連続体であると指摘した（Table. 1）。誇大型自己愛傾向は、自己顕示的で他者の反応に鈍感であるという対人関係上の特徴がある。これは Kernberg の考える自己愛のタイプである。これに対し、過敏型自己愛傾向は、他者の反応に敏感で、注目されるのを避けるという特徴があり、これは Kohut の考える自己愛のタイプである。

この2類型は、臨床場面だけではなく、一般の自己愛傾向においても当てはめられている。Wink（1991）、Hibbard（1992）は、非臨床群を対象とし、自己愛傾向の2類型を見出した。日本でも、一般青年を対象に、この2類型に触れる研究が盛んに行われている（例えば、相澤，2002；中山，2006，2007；小塩，2002；清水・川邊・海塚，2007）。

## 3. 日本における過敏型自己愛傾向の問題

福井（1998）によると、「日本の症例における誇大的な自己の現れ方は、どちらかと言うとそれほど派手ではなく、臨床像はむしろ自己評価の低さ、抑うつ感、引きこもりといった形をとりやすい」。これは、Gabbard（1994）のいう過敏型に近く、日本の臨床場面では、過敏型自己愛傾向の事例が多いと考えられる。鍾（1994）によると、日本人の場合には、独立した2つの人格的関わりとしての人間関係や、世代間境界を明確にした三者関係より、母親ないし母性にとりこまれた関係として、二者関係としての基本的人間関係が存在している。そのため、対人関係の場の力動性に敏感にならざるを得ないように人間関係が展開している。そのような対人関係の文脈の中で適応していくためには、周囲を気につけないわけにいかない。よって周囲

Table. 1 Gabbard（1994）による自己愛傾向の2類型

周囲を気につけない自己愛的な人 （誇大型自己愛傾向）	過剰に気につける自己愛的な人 （過敏型自己愛傾向）
1 他人の反応の反応に気づくことがない。	1 他人の反応に過敏である。
2 傲慢で攻撃的である。	2 抑制的で、内気で、あるいは自己消去的でさえある。
3 自己に夢中である。	3 自己よりも、他の人びとに注意を向ける。
4 注目の中心にいる必要がある。	4 注目的になることを避ける。
5 送信者であるが、受信者ではない。	5 侮辱や批判の証拠がないかどうか、注意深く、他の人々に耳を傾ける。
6 明らかに、他の人びとによって傷つけられたと感じることに鈍感である。	6 容易に傷つけられたという感情をもつ。羞恥や屈辱を感じやすい。

を気にしない誇大型自己愛傾向よりも、過剰に気にかける過敏型自己愛傾向の事例の方が多くなると考えられる。

また、一般青年を対象とした先行研究では、誇大型自己愛傾向が自尊感情のレベルに正の影響を与えるのに対して、過敏型自己愛傾向が負の影響を与えることが示されている(小塩, 2001)。また土地・宮下(2005)では、過敏型自己愛傾向が強いほど不安やうつ傾向が高いことや、清水・岡村(2010)では、過敏型自己愛傾向が強いほどネガティブな反すう、不合理な信念、自己関係づけという認知特性をもつことが示されている。これより、過敏型自己愛傾向は不適応と関連していると考えられる。また、日本人青年の自己愛の測定においても、文化的背景を考慮して測定すべきであるという指摘がある(原田, 2009)。

以上より、日本では臨床群においても、一般青年を対象とした非臨床群においても、過敏型自己愛傾向が不適応と関連している。そのため、過敏型自己愛傾向に着目する必要がある。Gabbard(1994)の2類型では、過敏型自己愛傾向はKohutの考える自己愛のタイプである。日本の二者関係を中心とした文化において、過敏型自己愛傾向について検討していくために、Kohutの見解を取り入れることには意味があると思われる。そこで本稿では、Kohutの見解に基づいた自己愛に注目して、その研究の動向を展望した。

#### 4. Kohut による自己愛の発達理論

Kohutによる自己愛とは、自分の存在価値を確かめるエネルギー源であり、対象との関わりにおいて、己を獲得し、修復し、統合するものである(福井, 1998)。Kohut(1971, 1977, 1984)は、自己愛には独自の発達ラインがあると考え、自己の発達には、自己愛を満たし、満足感を与える対象や環境である自己対象が不可欠とした。

乳児はまとまった自己を持たず、断片的な自己の状態である。しかし、自己対象である親からの対応を通じて、中核自己と呼ばれる中心的な構造が形成される。この時期の幼児は、2つの自己愛的構造が形成される。1つは誇大自己と呼ばれ、自分は完全だと感じ、そうになりたいという欲求である。もう1つは、理想化された親像であり、理想化した親のイメージを心の中にもつことで、自分を万能な親の一部であると思うことである。この2つの自己愛的構造は、主に養育者である親とのやり取りの中で発達・変容していく。自己は、自己対象による賞賛や肯定の体験を通じて、自己評価が安定した状態へと調整される。幼少期において

自己対象は主に養育者であり、その後の発達とともにさまざまな人や環境へと変遷していく。成熟に伴い、自己対象が担っていた自己愛の機能は、自己対象との共感的な体験を通じて、自己の内的な機能に変容していく。それは児童期・思春期頃に始まり、青年期後期に達成するとされている(近藤, 2009)。

誇大性を認められたい欲求や理想化された対象と融合したい欲求が自己対象から満たされることによって、子どもの自己の発達が進むと考える。これらの欲求が十分に満たされないと、自己愛の発達は停滞、退行し、自己の融和性、凝集性を維持する心的構造が欠損する。誇大自己に対する自己対象の対応が不十分であると、自尊心の調整の困難が生じ、少しのことで自尊心が傷つき激しい自尊心低下が生じたり、自己顕示欲求に伴う強い恥の感情、自意識過剰、誇大性、興奮などが生じる。また自己対象の不十分な対応により、子どもの自己は損傷を受け、子どもは自己を傷つけられる不安から、自己の承認や尊敬を求める欲求を意識から排除しようとする。Kohutは、これを「水平分割(horizontal split)」とした。自己の障害を持つ人が、自信に乏しく、傷つきやすい基底には、誇大自己が潜んでいる。その一方で、自己の障害を持つ人は、ある面では誇大的な自己像を持っていることがある。これは、優越的態度や特別の配慮を求める傾向などそれと分かる形で現れることもあるが、高すぎる目標の追求などの背後に潜んでいることもある。この誇大性は対人関係の困難の原因になる(土地, 1997)。Kohutによると、この誇大性は、自己の障害を生み出した自己対象との関係において育ったものである。自己対象が、子どもの特性や能力の一部を自己愛的に賞賛したために、その部分が誇大的に強調されるようになる。本人は、自分の言動が誇大的であり、他人に不快感を与えるということには気づかない。このように、同じ自己のなかに誇大的な部分と自己評価の低さや空虚感という矛盾するものが併存していることを、「垂直分割(vertical split)」とした。

また、理想化された親イメージがうまく内在化されないと、理想システムの障害が生じ、内的な基準や理想に従って自分を方向づけることができない。理想化された親像を現実の他の人物に投影し、その人物からの承認や尊敬を強く求め、常に不安や緊張などを鎮めてもらい、自分を方向づけ導いてもらったりしないと安心できない。そして、このような外的な人物からの応答により、自己の心理的な安定や自己評価が左右されるという心理構造が生まれる。

## 5. 自己愛的脆弱性について

上地・宮下 (2002, 2005, 2009) は、Kohut の理論の緊張や不安を自分で緩和する力の弱さに注目した。この自己緩和能力の脆弱さを、Kohut も使用している自己愛的脆弱性とし、「自己愛的欲求の表出に伴う不安や他者の反応による傷つきなどを処理し、心理的安定を保つ力が脆弱であること (上地・宮下, 2009)」と定義した。そして、自己愛的脆弱性は、大なり小なりすべての人に存在するとし、上地・宮下 (2002, 2005) では、自己愛的脆弱性の指標として、①他者からの承認・賞賛への過敏さ、②潜在的特権意識とそれによる傷つき、③恥傾向と自己顕示の抑制、④自己緩和能力の不全、⑤目的感の希薄さ、の5つを挙げた。内容は以下の通りである。

①他者からの承認・賞賛への過敏さは、自分の言動や行動に対する承認・賞賛を強く求め、期待した承認・賞賛が得られないと自己評価が低下することを示す。自己評価や幸福感を維持する上で他者からの承認・賞賛に過度に依存すること、映し返しを求める欲求と理想化できる他者と一体化したい欲求の両方を反映している。

②潜在的特権意識とそれによる傷つきは、他者が特別の配慮や敬意をもって接してくれることを期待し、その期待が満たされないと不満や怒りが生じることを示す。このような傾向の背後には、特別の配慮がないと心理的安定や自己評価を保てないという脆弱性とともに、ある種の特権意識や誇大性が存在しており、露骨な優越感や自己顕示とは異なる隠蔽された形での誇大性の現れ方とした。

③恥傾向と自己顕示の抑制は、注目を浴びたり自己を顕示したりする場面に遭遇すると強い恥意識が生じるため、自己顕示を抑制しがちになることを示す。自己顕示に対して過度な自己嫌悪を感じる傾向があり、自然な自己顕示ができない。これは顕示欲求が自己全体のなかにうまく統合されていないためである。適切に満たされることのなかった顕示欲求は、自己のなかに統合されず、抑圧され、未成熟なままとどまる。そのような未成熟な顕示欲求を抱えた人は、顕示欲求を刺激されると、強い緊張や恥などを体験するため、かえって顕示を押さえがちになる。

④自己緩和能力の不全は、強い不安や情動などを自分で調節・緩和する力が弱く、他者に調節・緩和してもらおうとすることを示す。強い感情に襲われたときに、平静さと力を備えた他者と一体化し、その感情を緩和してもらって体験が繰り返されるとき、その他者が果たしてくれた機能が内在化され、感情を自分で緩和

する機能が生まれる。こうしたプロセスがうまく進まなかった場合には、感情を自分で緩和する力が弱くなり、強い感情が生じたときには、それを他者に緩和してもらわなければならない。

⑤目的感の希薄さは、自己を方向づける目標が希薄であり、空虚感を体験しやすいことを示す。重要な他者から自己を確認・承認・賞賛してもらおうような体験が繰り返されるとき、自己を顕示して承認や賞賛を求める欲求が成熟し、内在化された野心が形成される。また、理想化された他者と同一化・一体化する体験が繰り返されるうちに価値や理想が内在化される。そして、人間の諸活動のうちのある領域において、こうした野心と理想が結びついて一つの目標構造が構成され、それが個人特有の才能や技能を活性化するとき、自己には意味と方向性が生まれる。このようなプロセスがうまく進まないときには、そうした目標構造も未形成または脆弱なままにとどまる。

上地・宮下 (2005) は、過敏型自己愛傾向を測定する尺度として、以上の5つの指標を測定する下位尺度からなる自己愛的脆弱性尺度を作成した。しかし上地・宮下 (2009) で、自己愛的脆弱性尺度短縮版を作成するにあたって、5つの指標のうち⑤目的感の希薄さを削除している。これは、他の4指標がいずれも他者への反応にみられる特徴を表現しているのに対して、この指標は、目的感という個人内的なものであるためである。

上地・宮下 (2002, 2005, 2009) の自己愛的脆弱性は、Kohut の見解を基にしている。そこで本研究では、青年期の自己愛傾向を自己愛的脆弱性という視点から捉えていく。

## 6. 自己愛とアイデンティティの関連

先述したように、青年期は自己愛の高まる時期であるとされるが、それは青年期が、親から分離し、自分自身を見つめ、アイデンティティ (Erikson, 1950) を確立していく時期である事と関連している。Kohut (1971) によると、統一的な自己の体験は、自己イメージに、安定した自己愛供給がなされる結果、自我が凝集して機能するための重要な前提条件である。小此木 (1981) も同様に、自我のエネルギー源となるのが自己愛の満足とし、健康な自己愛はアイデンティティの原型であり、源泉であるとした。また藤原 (1981) は、健康な自己愛こそ自我の自律的発達の基礎であると考え、このような自己愛が対象関係の中で相互一致の感覚、その普遍性と連続性の体験を通してアイデンティティの基礎になるとした。以上から、安定した自

己対象との体験で満たされた自己愛は、自我が機能し、発達していくための源泉であり、アイデンティティの確立を支えるといえる。

非臨床群の青年を対象とした自己愛とアイデンティティの関連を検討した実証研究は多数見られる。誇大型自己愛傾向とアイデンティティとの関連をみた研究に、三船・氏原（1991）と須永・陶山（1993）の研究がある。三船・氏原（1991）は、Raskin & Hall（1979）により作成されたNPIとアイデンティティ拡散感との関連を調べた。その結果、NPI全体とアイデンティティ拡散感とは無相関であること、そしてNPIのうち、「注目願望」を意味する下位尺度がアイデンティティ拡散感と有意な正の相関関係に、「リーダーシップ」「野心」「優越感」下位尺度がアイデンティティ拡散感と有意な負の相関関係にあることを示した。須永・陶山（1993）は、アイデンティティ確立過程における自己愛傾向の様相を明らかにすることを目的に、アイデンティティの確立、基本的信頼や自律性といったアイデンティティの基礎の形成、自己投入と自己愛傾向を検討した。その結果、「アイデンティティの確立」と誇大型自己愛傾向は、正の相関がみられている。

誇大型自己愛傾向と過敏型自己愛傾向とアイデンティティの関連を検討した研究としては、中山（2006）と清水・川邊・海塚（2008）、松下・橋村（2009）があげられる。中山（2006）は、多次元同一性尺度（谷，2001）との関連を調べた。その結果、過敏型自己愛傾向は多次元同一性尺度全体と負の関連、誇大型自己愛傾向は正の関連を示した。清水・川邊・海塚（2008）においても、過敏型自己愛傾向を意味する対人恐怖心が低いと、アイデンティティの達成は高いという結果が得られた。松下・橋村（2009）では、自己愛人格目録短縮版（小塩，2002）と多次元同一性尺度（谷，2001）の関連を検討し、誇大型自己愛傾向と多次元同一性尺度の「対他的同一性」「心理社会的同一性」との関連の高さを示唆している。

自己愛的脆弱性とアイデンティティとの関連を検討した研究には、上地・宮下（2002）の研究がある。自己愛的脆弱性と同一性混乱尺度（砂田，1979）との関連を検討した結果、自己愛的脆弱性尺度の5因子のうち、「目的感の乏しさ」、「承認・賞賛への依存」、「自己緩和能力の弱さ」、「自己顕示の不全」の4因子が同一性混乱尺度と有意な正の相関を示した。

これらの先行研究から、誇大型自己愛傾向はアイデンティティの形成を促進するが、過敏型自己愛傾向はアイデンティティの拡散と関連することが示唆されている。しかし、いずれの研究もアイデンティティに関して、Erikson（1950）の8つの心理社会的発達段階

のうち、第5段階の「アイデンティティ 対 アイデンティティ拡散」のみを扱っており、各段階の発達の危機をどのくらい健全に切り抜け、どのくらいしっかりとした達成感覚を身につけているかという視点から捉えた研究はみられない。自己愛の発達は、発達早期からの自己対象との体験が関わっている。そのため第5段階のみでなく、各段階の心理社会的課題の達成感覚を検討することで、自己愛と自我の発達の関連を検討することが可能と考えられる。

## 7. 自己愛と自己対象体験との関連

Kohut（1984）によると、個人は生涯、自己対象の支持的な反応を、その形を変えながらも必要としている。また、この自己対象とは、自己を支えてくれる他者の機能を「体験すること」であり、個人の主観体験を意味している（上地，2009）。そのため、これまでの重要な他者との関わりを、個人が主観的にどのように捉えているかは、その個人の自己愛傾向と関連していると考えられる。

発達早期の自己対象は主に養育者であり、その多くが親と考えられる。自己愛傾向と親の養育態度の関連を検討した先行研究には、宮下（1991）、中村・松並（2001）、清水・海塚（2004）があげられる。しかし、これらの先行研究においては、自己愛傾向を測定する尺度が異なることもあり、一貫した結果が得られていない。

自己対象という視点に注目した先行研究には、原田（2005，2006）、近藤（2009）がある。原田（2005）は質問紙調査により、親との自己対象体験が青年の自己構造に与える影響を検討した。その結果、共感的一応答的な母親と父親との自己対象体験が自己構造の安定性に影響を及ぼしていた。また原田（2006）は、半構造化面接を行い、それまでの人生における自己対象体験が青年期における自己確立・自己形成をどのように支えているかを検討した。その結果、親との自己対象体験が十分であると、その後の自己対象関係の拡大や発達が生じるが、親との自己対象関係に不十分な側面や疎通性の乏しい側面が存在するほど、その後の自己対象関係においてそれを補うための自己対象体験が必要となり、青年期の自己確立・自己形成の過程が遅れること、親との自己対象体験に自己支持的な部分が存在しないとその後の自己対象関係の拡大にも不具合が生じ、その過程がさらに遅れることが検証された。近藤（2009）では、S-HTPP法を用いて自己愛傾向と自己対象との関連を検討した。S-HTPP法の人物像の特徴と相互作用に注目し、自己が自己対象をどのように体

験したかという視点から描画理解を行なった。その結果、相互交流が描かれるのは、過敏型自己愛傾向も誇大型自己愛傾向も低い健康な自己愛の状態と考えられる青年の場合が多かった。

Kohut (1984) は、「成人が成熟したかたちで選択する自己対象の自己支持的な効果を体験するときには、これまでのすべての段階の自己対象体験が無意識のうちに反響している」と述べており、自己対象体験を捉えるためには、意識的側面だけでなく、無意識的側面も捉える必要がある。しかし自己対象体験の無意識的側面を数量的に捉えた研究は近藤 (2009) しかなく、十分な知見が得られているとはいえない。

## 8. 今後の課題

Gabbard (1994) が自己愛性人格障害を対人的関わりにおける典型的なスタイルに基づいて2つの異なるタイプを両極とする連続体であると指摘して以降、自己愛研究は自己愛傾向を誇大型と過敏型の2類型を捉える視点が隆盛になっている。日本においては、文化的背景から心理臨床の現場において過敏型自己愛傾向の事例が多いこと (福井, 1998) や、一般青年を対象とした非臨床群において過敏型自己愛傾向が不適応と関連していること (上地・宮下, 2005; 小塩, 2001; 清水・岡村, 2010) から、過敏型自己愛傾向の諸側面を含んだ自己愛的脆弱性という視点から青年を捉えることは心理臨床において意義がある。

自己愛的脆弱性の基礎となる Kohut の理論においては、個人は発達早期から生涯、自己対象を必要としている。しかし、発達の視点から捉えた実証研究は少なく、一貫した結果も得られていないことから、Kohut の理論が実証できているとはいえない。青年が、これまでの自己対象を振り返り、どのような体験をしていたか実証的な研究を積み重ねることが求められている。また、自己対象体験を捉える際には、質問紙調査や面接調査といった意識的側面だけでなく、投映法を用いて無意識的側面も扱うアプローチも有効であると考えられる。

以上から、自己愛的脆弱性に関する研究領域には、課題が残されている。しかしこれはこの領域の今後の発展可能性を示唆していると考えられる。まずは自己愛的脆弱性に関する実証研究を進め、現代の青年を理解し援助していく視点の一助となることが望まれる。

## 【引用文献】

相澤直樹 (2002). 自己愛的人格における誇大特性と

過敏特性 教育心理学研究, 50, 215-224.

Erikson, E. H. (1950). *Childhood and Society*. New York: W. W. Norton. (エリクソン, E. H. 仁科弥生 (訳) (1977/1980). 幼児期と社会 I・II みすず書房)

Freud, S. (1914). On narcissism: an introduction. *Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud*. London: Hogarth. (フロイト, S. 懸田克躬・吉村博次 (1969). ナルシズム入門 懸田克躬・高橋義孝他 (訳) フロイト著作集第5巻 人文書院 pp.109-132.)

Fromm, E. (1956). *The Art of Loving*. New York: Harper. (フロム, E. 鈴木 晶 (訳) (1991). 愛するということ 新訳版 紀伊國屋書店)

藤原正博 (1981). 自我同一性と自尊感情の関係 遠藤辰雄 (編) アイデンティティの心理学 ナカニシヤ出版 pp.85-89.

福井 敏 (1998). 誇大的な自己-自己愛性障害- ころの科学, 82, 75-80.

Gabbard, G. O. (1994). *Psychodynamic Psychiatry in Clinical Practice: The DSM-IV Edition*. Washington, D. C.: American Psychiatric Press. (ギャバード, G. O. 館 哲朗 (監訳) (1997). 精神力学的精神医学-その臨床実践 [DSM-IV版]-③臨床編: II 軸障害 岩崎学術出版社)

原田和典 (2006). 青年期における自己対象関係による支えについての実証的研究-半構造化面接による人生のふりかえりから- 青年心理学研究, 18, 19-40.

原田和典 (2005). 親との自己対象体験と自己構造の関連性についての実証的研究 心理臨床学研究, 23, 434-444.

原田 新 (2009). 自己愛の過敏性に関する一考察 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 3, 19-27.

Hibbard, S. (1992). Narcissism, shame, masochism, and object relation: An exploratory correlational study. *Psychoanalytic Psychology*, 9, 489-508.

上地雄一郎 (2009). Kohut の自己愛性パーソナリティ障害論の批判的検討 岡山大学大学院教育学研究科研究集録, 141, 143-152.

上地雄一郎 (1997). 自己心理学的視点による学生カウンセリング-価値的次元の対話が重要であった事例を通して- 学生相談研究, 18, 1-10.

上地雄一郎・宮下一博 (2009). 対人恐怖傾向の要因としての自己愛的脆弱性, 自己不一致, 自尊感情の関連性 パーソナリティ研究, 17, 280-291.

上地雄一郎・宮下一博 (2005). コフォートの自己心理学に基づく自己愛的脆弱性尺度の作成 パーソナリ

- ティ研究, 14, 80-91.
- 上地雄一郎・宮下一博 (2002). コフォートの自己心理学に基づく自己愛的脆弱性尺度の作成の試み 甲南女子大学研究紀要, 38, 1-10.
- Kernberg, O. F. (1982). Narcissism. Gilman, S. L. (Ed.) *Introducing Psychoanalytic Theory*. New York: Brunner/Mazel, pp.126-136. (カーンバーグ, O. F. 小此木啓吾 (訳) (1984). 自己愛 岩波講座精神の科学別巻 諸外国の研究状況と展望 岩波書店 pp.280-294.)
- Kohut, H. (1984). *How Does Analysis Cure?* Chicago: The University of Chicago Press. (コフォート, H. 本城秀次・笠原 嘉 (監訳) (1995). 自己の治癒みすず書房)
- Kohut, H. (1977). *The Restoration of the Self*. New York: International Universities Press. (コフォート, H. 本城秀次・笠原 嘉 (監訳) (1995). 自己の修復 みすず書房)
- Kohut, H. (1971). *The Analysis of the Self*. New York: International Universities Press. (コフォート, H. 水野信義・笠原 嘉 (監訳) (1994). 自己の分析 みすず書房)
- 小松貴弘 (1999). 自己愛 氏原 寛・小川捷之・近藤邦夫・鎌 幹八郎・東山紘久・村山正治・山中康裕 (編) カウンセリング辞典 ミネルヴァ書房 pp.252-254.
- 近藤孝司 (2009). S-HTPP 法における自己愛の諸相 心理臨床学研究, 27, 333-343.
- 松下姫歌・橋村裕治 (2009). 大学生の自己愛傾向と自我同一性との関連について 広島大学心理学研究, 8, 271-280.
- 三船直子・氏原 寛 (1991). 青年期の自己愛人格について—実証的研究を中心に— 大阪市立大学生活科学部紀要, 39, 199-213.
- 宮下一博 (1991). 青年におけるナルシズム(自己愛)的傾向と親の養育態度・家族の雰囲気との関係 教育心理学研究, 39, 455-460.
- 中村 晃・松並知子 (2001). 自己愛と親の養育態度 日本教育心理学会総会発表論文集, 43, 341.
- 中村留貴子 (2004). 自己愛(ナルシズム)氏原 寛・亀口憲治・成田善弘・東山紘久・山中康裕 (編) 心理臨床大事典 改訂版 培風館 pp.1077-1079.
- 中山留美子 (2007). 児童期後期・青年期における自己価値・自己評価を維持する機能の形成過程—自己愛における評価過敏性, 誇大性の関連の変化から— パーソナリティ研究, 15, 195-204.
- 中山留美子 (2006). 青年期における自己価値・自己評価の維持機能とその発達—評価過敏性・誇大性を指標として— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要心理発達科学, 53, 197-198.
- 小此木啓吾 (1999). 精神分析から見た思春期心性 思春期青年期精神医学, 9, 131-144.
- 小此木啓吾 (1981). 自己愛人間 朝日出版社.
- 小塩真司 (2002). 自己愛傾向によって青年を分類する試み—対人関係と適応, 友人によるイメージ評定からみた特徴— 教育心理学研究, 50, 261-270.
- 小塩真司 (2001). 自己愛傾向が自己像の不安定性, 自尊感情のレベルおよび変動性に及ぼす影響 性格心理学研究, 10, 35-44.
- 小塩真司 (1998). 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, 46, 280-290.
- Raskin, R., & Hall, C. S. (1979). A narcissistic personality inventory. *Psychological Reports* 45, 590.
- 清水健司・海塚敏郎 (2004). 青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の基礎的研究 広島国際大学心理臨床センター紀要, 3, 23-32.
- 清水健司・川邊浩史・海塚敏郎 (2008). 対人恐怖心性—自己愛傾向2次元モデルにおける自我同一性の様相 心理臨床学研究, 26, 97-103.
- 清水健司・川邊浩史・海塚敏郎 (2007). 青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の相互関係について 心理学研究, 78, 9-16.
- 清水健司・岡村寿代 (2010). 対人恐怖心性—自己愛傾向2次元モデルにおける認知特性の検討—対人恐怖と社会恐怖の異同を通して— 教育心理学研究, 58, 23-33.
- 砂田良一 (1979). 自己像との関係からみた自我同一性 教育心理学研究, 27, 215-220.
- 須永範明・陶山 智 (1993). 同一性確立過程における自己愛の様相 (2) 日本性格心理学大会発表論文集, 49.
- 谷 冬彦 (2001). 青年期における同一性の感覚の構造—多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成— 教育心理学研究, 49, 265-273.
- 鎌 幹八郎 (1994). 日本的自我のアモルファス構造と対人関係 広島大学教育学部紀要第一部心理学, 43, 175-182.
- Wink, P. (1991). Two faces of narcissism. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 590-597.